

成熟を目指して(6)

神の臨在にふれる礼拝 その3 イエス・キリストの十字架によって成就されたこと

1.はじめに

おはようございます。

前回、神の臨在にふれる礼拝その2として、少しだけ幕屋のお話をさせていただきました。

幕屋とは、旧約聖書出エジプト記に教えられている、神を礼拝するための施設、場所でしたが、その幕屋は会見の天幕とも呼ばれていました。私たちが神を礼拝する、ということだけではなく、神が私たちにお会いになってくださる場所という意味です。

旧約聖書の時代は、会見の天幕に示されている「至聖所」で年に一度、大祭司だけが神にお会いすることになっていましたが、新約聖書の時代、イエス・キリストによって、至聖所と聖所の間の幕、隔ての幕が上から裂けたことを通して、いつでも、誰でも、そしてどこでも神にお会いすることができるようになりました。また、イエスは私たちの間に見える方として現れて下さったのですが、ヨハネの手紙第1 1:1によると「初めからあったもの、私たちが聞いたもの、目で見えたもの、じっと見、また手でさわったもの、すなわち、いのちのことばについて」と教えられているように、ただ見ただけではなく、

1)イエスを「初めからあったもの」と教えています。これは、イエスが神であることを象徴しています。

2)イエスを「私たちが聞いたもの」と教えています。ヨハネは実際、イエスから直接、イエスの話を聞いた人物の一人です。しかも、彼は少しずつ、物理的にも精神的にも、イエスに近づいて、イエスの言葉を聞きました。また、ただ、聞こえていただけではなく、またただ耳から音として聞いていただけではなく、イエスの話、イエスの言葉の深さを徐々に知り、それを味わいながら聞いていたのです。

3)イエスを「目で見えたもの」と教えています。見えない神が見える形をもってヨハネの前に現れて下さったのですが、彼は自分自身の目でイエスを見たことを証言しています。これは、ユダヤ人にとっては非常識、非現実的なことであったかもしれません。しかし、ヨハネはユダヤ人の常識を覆すことを自分自身の体験として証しました。

4)イエスを「じっと見」と教えています。見ただけではなく、また見るだけでいいだけではなく、ヨハネは人の子をじっと見ていました。この「じっと見」は、別の訳によると「じっと見つめ」と訳されています。じっと見る、じっと見つめることには、見る人の意思が反映されていると思います。ただ見えているだけではなく、意思をもって見る。意思をもって見つめる。視界に入っているということではなく、意思をもって、また理解するという意図をもってイエスを見つめていました。

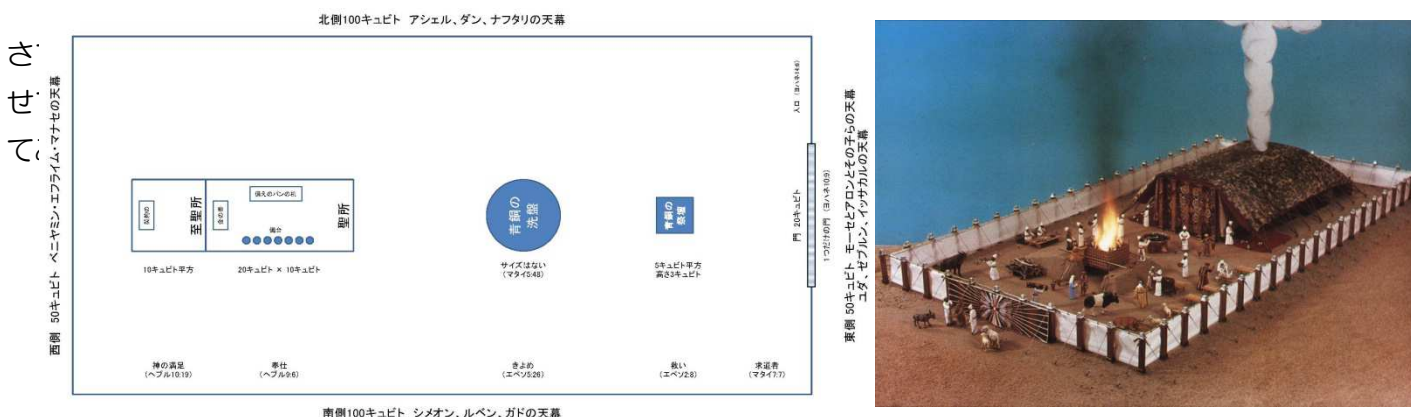
5)イエスを「手でさわったもの」と教えています。3番目の「目で見えたもの」と同じように、人であればいくらでもさわることができるのですが、神であれば見ることはおろか、さわることなどできるはずがありません。しかし、実際にイエスをさわることができるほどの関係であったことを、ヨハネは告白しました。さわ

ることができるのは関係性の近さだけではなく、距離の近さも表現しています。実際、神は私たちが見ることもさわることもできないような、はるか彼方にいらっしゃる方ではなく、私たちの近くにいらっしゃる方を、ヨハネはここで示したかったように思います。

ヨハネは、このように教えました。突然パッと現れた偉い人、ということではなく、まさにイスラエル、ユダヤ人の歴史そのものである幕屋、会見の天幕が、実はイエスをかたどったものであり、幕屋の実態が自分自身の目の前にいることが分かったとき、彼はどれほど驚いたのかと思います。

そして、イエスをかたどった幕屋が存続している限り、まことの聖所への道は開かれず、その道を開くためにイエスご自身が完全な礼拝のいけにえとしてご自身をささげられたことを学んだ、理解したときに、彼は一層、どれほど驚いたのか、想像することすらできません。イエスは、ただ神が見える形をとってこの世に来られただけではなく、かつてモーセを通して示された会見の天幕を廃止し、永遠に変わることはないまことの聖所を実現された、道を開かれたのです。

少し長くなりましたが、大変重要なポイントですので、振り返りをさせていただきました。



2.幕屋とささげものには「意味」があった

幕屋の平面図を見ていただきますと、門から順番に、青銅の祭壇、青銅の洗盤、会見の天幕となっています。会見の天幕には、手前に聖所、隔ての幕があって、奥に至聖所があります。また、旧約聖書レビ記 1章から7章には、5種類のささげもの、いけにえについて教えられています。順に全焼のいけにえ（燔祭）、穀物のささげもの（素祭）、和解のいけにえ（酬恩祭）、罪のためのいけにえ（罪祭）、罪過のためのいけにえ（愆祭）です。これらの、幕屋に設置されているもの、またささげもの（いけにえ）には、意味があります。ヘブル人への手紙 8:5にはこのように教えられています。

ヘブル 8:5 その人たちは、天にあるものの写しと影とに仕えているのであって、それらはモーセが幕屋を建てようとしたとき、神から御告げを受けたとおりのものです。神はこう言われたのです。「よく注意なさい。山であなたに示された型に従って、すべてのものを作りなさい。」

幕屋にあるもの、またその幕屋の中でささげられたものが、天にあるものの写しと影であるなら、その写しと影であるものに、イエス・キリストを透かして見ることができれば、その一つ一つの意味を学ぶことができます。旧約聖書に教えられている様々な儀式や、多くの聖徒たちを通して示された出来事に対して、私たちが学ぶべきことがあるとするなら、大きく2つの領域に分けることができると思います。一つは、**起こった事実そのものを学び、そこから教訓として私たちが学ぶべきことを学び、実践する。**私たちの行動や言動に対する学びと言えるかもしれません。そしてもう一つは、**旧約聖書を通して神が私たちに示された本質を学び、神の偉大さと神のご計画の深さに触れ、神により近づく。**私たちの内面がより神に近づくための学びと言えると思います。既に成就した預言、これから成就する預言について学ぶことも、興味本位で過去や未来を紐解くのではなく、歴史と未来が神のご計画によって支配されているものであることを知り、神の前にこうべを垂れ、より従順となることが目的であるべきかと思えます。

では、幕屋について順に学んでいきたいと思えます。

3.一つだけの門

幕屋には入り口が一つだけありました。建物や施設に門、入り口が一つだけある、というのは一見普通の、ありふれたことと思われるかもしれませんが、長辺が44メートルもある幕屋で、しかもたくさんの方が出入りする幕屋ですから、入り口はたくさんある方が合理的だと思います。しかし、神は入り口が一つの幕屋を示されました。ヨハネの福音書10章には、イエスが牧者と羊について教えています。より牧者がイエスご自身であり、羊は私たちのことを示されているのですが、ヨハネの福音書10:9でこのように教えられています。

10:9 わたしは門です。だれでも、わたしを通過して入るなら、救われます。また安らかに出入りし、牧草を見つけます。

また、ヨハネの福音書14:6にはこのように教えられています。

14:6 イエスは彼に言われた。「わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。わたしを通してでなければ、だれひとり父のみもとに来ることはありません

たくさんが入り口、門があって、どの入り口、どの門から入っても幕屋の中央にある聖所、至聖所に行くことができたのではなく、一つの入り口、一つの門からでないと聖所、至聖所に行くことができなかったことは、イエス・キリストが「イエスご自身が門」であり、私（イエス）を通してでなければ、父のみもとに来ることができない。幕屋に置き換えて考えるなら、神がご自身を現わされた至聖所に行くことができないことを示しています。神への道、神への門は、誰を通してでもよいのではなく、唯一神のひとり子であるイエスだけが神への道であり、神への門であるのです。残念ながら、新約聖書の時代から今に至るまで、いろんな人がキリストになりかわって神への門、神の代弁者、新たな救い主かのように自称していますが、新約聖書ははっきりとこれらの人たちを否定しています。神への門、神への入り口は、イエス・キリストだけです。イエスを通らなければ誰も神に近づくことはできません。

4.青銅の祭壇

一つの入り口である門を通り、幕屋の中に入ると、まず青銅の祭壇があります。ここでささげもの、いけにえを持ってきた人たちはそのささげもの、いけにえをささげます。

神は、一つの門をいつも私たちのために開いていてくださいますが、私たちが神に近づくために、まず神からの救いをいただかなければなりません。ここで、誤解のないように整理しておきたいと思いますが、神はどのような人であっても、その門を開いていてくださいます。そこには何の差別もありません。神は、すべての人を愛して、すべての人に対して神への道、救いを与えてくださいました。しかし、すべての人に対して与えられる救いを受け入れるかどうかは、その人の意思によります。もし、神がイエスによって与えてくださる救いを欲しいと願うなら、神はその人に無条件で救いを与えてくださいますが、自らその救いを拒むなら、残念ながらその救いはその人には届きません。門は開かれています、救いに至るかどうか、言い換えれば門をくぐり中に入るかどうかは門の前に立った人が決めることです。そして、門を通過して中に入り、言い換えれば救われたい、と願う人がまず向き合うのが青銅の祭壇です。ここでは、ささげもの、いけにえがささげられるのですが、人がまず神にささげなければならないのが、罪のためのいけにえです。神と人との間にある罪の問題を解決することなく、神に近づくことはできません。神は聖なる方ですので、罪を持ったまま神の前に近づくことはできません。人がもし、神の救いをいただいて神に近づきたいと願うなら、罪が解決されなければならない。ですから、この青銅の祭壇では罪のためのいけにえ以外のいけにえ、ささげものもささげられましたが、まず罪が解決されるために、この祭壇が門のすぐ近くに置かれて、罪を解決することが求められました。

このことは、イエスが十字架によって成し遂げられた救いの御業にもはっきりと見られます。イエスの十字架での7つの言葉の内、最初にイエスが言われたのがルカの福音書 23:34 です。

ルカ 23:34 そのとき、イエスはこう言われた。「父よ。彼らをお赦しください。彼らは、何をしているのか自分でわからないのです。」彼らは、くじを引いて、イエスの着物を分けた。

イエスは十字架上で、まず私たちの罪のために執り成されました。また、イエスの十字架についてヘブル書の記者はこのように教えています。

ヘブル 9:12 また、やぎと子牛との血によってではなく、ご自分の血によって、ただ一度、まことの聖所に入り、永遠の贖いを成し遂げられたのです

つまり、イエスの十字架こそ、まことの聖所そのものであったということです。

整理すると、このようになります。イエスは、まことの聖所として、十字架を受け入れられました。聖所では、一つの門を通過して中に入ると、まず青銅の祭壇があり、罪を犯した人はその祭壇で定められたいけにえを、自分自身の身代わりとしてささげることを通して、罪のゆるしを受けましたが、イエスはまことの聖所に、ご自分の血をもって入られ、イエスを身代わりとして受け入れた人、すなわちイエスを救い主として受け入れた人のために、ご自身を罪のためのいけにえとしてささげてくださいましたのです。そのことを象徴して「父よ、彼らをお赦しください。彼らは、何をしているのか自分でわからないのです。」と、罪のための執り成しをされたのです。

青銅の祭壇は、罪を犯した人の罪がゆるされるために、罪のためのいけにえがささげられましたが、イエスはご自身を救い主として受け入れる人たちの身代わりとなって、罪のためのいけにえとなって、ご自身を十字架でささげてくださいましたことが、幕屋とささげものを通してあらかじめ示されていたのです。このこともまた、

ヘブル書の記者が「天にある写しと影」と教えたことの一つです。

5.青銅の洗盤

ユダヤ人たちは、ささげもの、いけにえを携えて青銅の祭壇までは進むことができましたが、彼らは自分自身の身代わりであることを示すために、いけにえに手を置きました。その後、彼らはそのいけにえをほふりますが、ほふった後は祭司がそのいけにえを祭壇で焼いて煙にします。レビ記で教えられているささげもの、いけにえについてはここまでで完結しますが、祭壇の奥にある聖所、そして至聖所に向かうためにはこの青銅の洗盤で両手と両足をきよめなければなりません。もちろん、ここから先は祭司だけが進むことができます。この洗盤には、サイズが定められていませんでした。ほかの用具についてはすべてサイズが明記されているのですが、この洗盤だけにはサイズが定められていません。これは、救いを受けた私たちの歩み、信仰生活に対するきよめと赦しについて教えています。私たちは、残念ながら救いを受けてこの世の価値観、罪とは無関係になった存在でありながら、いつまでもこの世のいろいろなものに振り回され、誘惑され、罪を犯してしまいます。しかし、どのような罪であっても神はイエス・キリストによって、赦してくださいます。その回数や罪の程度は関係ありません。もし、一定回数以上の罪がアウト、あるいは一定の基準以上に悪い罪はアウト、ということであれば、イエス・キリストによる救いが不完全なものということになってしまいます。青銅の洗盤にはサイズがありませんでした。どのような罪であっても、どれほどの罪であっても、そのサイズに関係なく赦されることを示しています。

6.私たちは旧約聖書の祭司と同じ立場に変えられた

今までのお話でおわかりかもしれませんが、旧約聖書の時代では、ユダヤ人であれば誰でもささげものやいけにえをささげることができました。動物のいけにえの場合は、その上に手を置いて自分自身の身代わりとしてささげました。しかし、実際に祭壇の上で焼いて煙にするのは祭司だけに許されていました。また、さらにその先にある聖所に近づき、その中に入って奉仕をするのは祭司だけ、しかも隔ての幕の内側に入ることができるのは大祭司が年に1度だけ、という限定的な礼拝でした。人と時が限定されていました。誰でも、どこでも、いつでも、ということではありませんでした。

この後のお話の前に、新約聖書の時代になって私たちに許されていることについて明確にしておきたいと思います。エペソ人への手紙 2:11-18 を開きたいと思います。

2:11 ですから、思い出してください。あなたがたは、以前は肉において異邦人でした。すなわち、肉において人の手による、いわゆる割礼を持つ人々からは、無割礼の人々と呼ばれる者であって、

2:12 そのころのあなたがたは、キリストから離れ、イスラエルの国から除外され、約束の契約については他国人であり、この世にあって望みもなく、神もない人たちでした。

2:13 しかし、以前は遠く離れていたあなたがたも、今ではキリスト・イエスの中にあることにより、キリストの血によって近い者とされたのです。

2:14 キリストこそ私たちの平和であり、二つのものを一つにし、隔ての壁を打ちこわし、

2:15 ご自分の肉において、敵意を廃棄された方です。敵意とは、さまざまの規定から成り立っている戒めの律法なのです。このことは、二つのものをご自身において新しいひとりの人に造り上げて、平和を実現するためであり、

2:16 また、両者を一つのからだとして、十字架によって神と和解させるためなのです。敵意は十字架によって葬り去られました。

2:17 それからキリストは来られて、遠くにいたあなたがたに平和を宣べ、近くにいた人たちにも平和を宣べられました。

2:18 私たちは、このキリストによって、両者ともに一つの御霊において、父のみもとに近づくことができます。

今日お集りの皆さんの中にユダヤ人の方はいらっしゃらないと思いますが、私たちはユダヤ人ではありませんし、ましてやレビ族でもなく、アロンの子孫である祭司でもありません。旧約聖書の時代では、イスラエルの国から除外され、約束の契約については他国人、すなわち無関係であったのですから、神に対していけにえやささげものを、その幕屋を通してささげる存在ではありませんでした。しかし、新約聖書の時代、すなわちイエス・キリストによって新しい幕屋、新しい礼拝への道が開かれました。その道について、パウロは13節で「以前は遠く離れていたあなたがたも、今ではキリスト・イエスの中にあることにより、キリストの血によって近い者とされたのです。」と教え、また18節で「私たちは、このキリストによって、両者ともに一つの御霊において、父のみもとに近づくことができます。」と教えています。すなわち、私たちは旧約聖書の時代の祭司ではありませんが、イエス・キリストによって、すべての人が神に近づくことができるもの、言い換えればアロンの子孫と同じように神に最も近いところで礼拝することができるものに変えられたのです。ですから、私たちにとって、旧約聖書に教えられている大祭司や祭司、幕屋、ささげものについて学ぶことには大きな意義があります。それらは、神によって選ばれた種族、祭司にのみ許されていたものですが、それらも天にあるものの写しと影でした。私たちは、旧約聖書の時代の祭司よりも、もっと近くで神を礼拝することが許されています。天における礼拝の実体を見て、それを形にした幕屋や祭司、ささげものについて学ぶことは、私たちに許されている、開かれている礼拝を学ぶために大変有意義な学びになるのです。

このことを少し別のことで考えてみたいと思います。今日集まっていたいただいている方々は、関西の方が多いかと思います。もともと静岡県や山梨県の方にとってはわかりにくい例えになるかもしれませんが、関西で生まれ育った私にとって、山と言えば生駒山、金剛山、六甲山でした。日本一高い富士山は写真で見て、高い山なのだろう、と思ってはいましたが、実際初めて富士山を見たのが中学生の時です。その時に、自分の視点よりも遥かに高いところに頂上がある富士山を見て、本当に驚きました。なぜ驚いたかということ、3776メートルという高さを六甲山や金剛山、生駒山との比較で感じたからです。山頂からの距離によって、山の高さの感じ方は変わるかもしれませんが、高い山とは六甲山、金剛山と思っていた私にとって、富士山の高さは衝撃的でした。こんなに高い山だったのか、と本当に驚きました。富士山の高さを、周辺にある低い山で体感したのです。

旧約聖書における礼拝やささげものを学ぶことは、新約聖書における祝福と恵みの偉大さを学ぶために、大変参考になるのは、山の高さを感じることに通じると思います。新約聖書だけでその祝福と恵みを学ぶことに、決して不足はないと思いますが、私たちが受けたものをより具体的に感じるために、旧約聖書の時代における限定的な祝福や恵み、導きを学ぶことは大変意義深いと思います。決して、ユダヤ人が限定的な、小さな祝福をいただいていたということではありません。実際、イザヤ書 43:4 で神はユダヤ人に対して、

イザ 43:4 わたしの目には、あなたは高価で尊い。わたしはあなたを愛している。だからわたしは人をあなたの代わりにし、国民をあなたのいのちの代わりにするのだ。

と教えられました。神が高価で尊いと評価されたということは驚くべきことです。しかし、そのようなユダヤ

人でさえ、神の奥義であるキリストによって実現された本当の礼拝、本当の幕屋の写しと影に仕えているに過ぎなかったのです。

7.今日の振り返り

かなり複雑なお話になりましたので、今日はこのあたりまでにしたいと思います。少し振り返ってみましょう。まず、前回の振り返りとして、ヨハネの体験から教えた、イエスとの5つの関わり方についてお話ししました。

1:1 初めからあったもの、私たちが聞いたもの、目で見えたもの、じっと見、また手でさわったもの、すなわち、いのちのこばについて、

初めからあったものとは、この方が永遠の存在である神であることを教え、私たちが聞いたものとは、ヨハネ自身がイエスから直接聞いていたこと、ただ聞くだけでなく、聞いたことを深く理解し味わっていたことを教え、目で見えたものとは、目に見えない神、見ることが許されていなかった神を自分の目で見ることが出来る存在として現れてくださったことを教え、じっと見とは、ヨハネはこの方をただ物理的に見えていただけでなく、意思をもってじっと見つめていたことを教え、手でさわったものとは、関係の近さ、距離の近さの両方を教えています。遥か彼方にいて、見えるか見えないか、聞こえるか聞こえないかという状況でイエスを体験したのではなく、まさに手の届くところにいらっしゃったことを教えています。

次に、旧約聖書に教えられている幕屋やささげものには意味があったことについてお話ししました。今回のシリーズの中で何度か開きました、ヘブル人への手紙 8:5 にはこのように教えられています。

ヘブル 8:5 その人たちは、天にあるものの写しと影とに仕えているのであって、それらはモーセが幕屋を建てようとしたとき、神から御告げを受けたとおりのものです。神はこう言われたのです。「よく注意なさい。山であなたに示された型に従って、すべてのものを作りなさい。」

すなわち写しと影であるものに、イエス・キリストを透かして見る事ができれば、その一つ一つの意味を学ぶことができるということについてお話ししました。雰囲気がいいからこのような幕屋やささげものを示されたのではなく、意味があり、意図があったのです。

続いて、幕屋にある3つの用具についてお話ししました。門、青銅の祭壇、青銅の洗盤です。門は一つしかありませんでした。この門はイエス・キリストを象徴しています。神に至る道は一つしかありません。神に至る一つしかない道こそイエス・キリストです。また、青銅の祭壇ではレビ記に教えられている5つのささげものがささげられました。ここでのささげものの内、罪のためのいけにえは、その人の罪を贖うためのいけにえでした。イエス・キリストが十字架でまず言われた言葉が「父よ。彼らをお赦してください。彼らは、何をしているのか自分でわからないのです。」でしたが、門を通して神に近づこうとする人たちの罪の問題をまず解決するために、青銅の祭壇が置かれたように、イエスも十字架を通して天にある本当の聖所に入られるときに、まず私たちの罪のために祈られました。ここでも、幕屋が天にあるものの写しと影であることが証明されています。そして、青銅の洗盤は、救いを受けた私たちが、弱さのゆえに犯してしまう様々な罪を、神は無限に赦されることを象徴するようにサイズの規定がありません。

最後に、私たちは旧約聖書に教えられている祭司と同じ立場に変えられたことを学びました。旧約聖書におけ

る祭司はこの地上の幕屋で仕えるのですが、私たちは天にあるまことの聖所、すなわちイエス・キリストによって明らかにされた天にあるまことの聖所にて神を礼拝するものとされたことを学びました。また、旧約聖書を学ぶことの意義の一つとして、私たちに与えられている大きな祝福と恵みをより実感することができることについてもお話をさせていただきました。

いかがでしょうか。短い時間で盛沢山のお話になりましたが、神があらかじめ計画されていたことを一つ一つ紐解くことで、与えられた祝福と恵みを実感し、それをかみしめて成熟を目指して一歩前に進むことができばと思います。

では、祈りましょう。